

平野五岳(律詩二首)善教寺蔵

解 読 木 許 博

(会員 佐伯市木立)

※「語注」(語句の説明)は省いたが現代語訳の中に含めている。

(一)

我郷何幸免灰塵(我が郷何ぞ幸なる、灰塵を免る)

我が郷土はなんと幸いなことか、戦争(西南戦争 明治10)の荒廃からまぬがれることができた

戦後樵秋不嘆貪(戦後秋を樵つて貧を嘆かず)

戦後は収穫の時期よろしく貧しさに苦しむ目にもあわず

惴惴難逢危急日(惴惴たる難、危急の日に逢うも)

おそろしいほどの苦しみに命のあぶない日にも出くわしたが

欣欣復作太平民(欣欣として復び太平の民と作る)

いま、こうして楽しい平和な世にもどった

遠山呈白見城雪(遠山は白を呈して城の雪を見る)

遠くの山には雪が積もり城にも雪が見える

残葉留緑入小春(残葉は緑を留めて小春に入る)

散り残りの葉の間に緑が見え小春の季節となった

道是都人防異病(道は是れ都て人異を防ぎて病むも)

道はどれも戦の災を防ぐために傷んだままだが

増増撃鼓祭明神(増々鼓を撃ちて明神を祭る)

村では元氣よく太鼓を鳴らしてお宮の祭がにぎわしい。

(二)

寒厨有酒不知寒(寒厨に酒有り、寒を知らず)

寒い台所に酒を見つけて暖まる

差覺醉中天地寛(覺えを差えは酔中天地寛し)

酔った状態となれば、天地はまことに広大

驚馬寧堪千里遠(驚馬は寧ろ千里の遠きに堪え)

のろい馬はかえつて千里の遠くまで歩めるし

鷓鴣早占一枝安(鷓鴣は早に一枝の安きを占む)

みそさざいはわずか一枝を占めて安心している

※「みそさざいは深林に巣をつくるが一枝だけ

で満足している」中国句、(莊子)

従心保欲敬初及(従心欲を保つて敬初めて及ぶ)

思いのままに自在に生きれば欲を持つことのでか
えつていつくしみの心も起さる

與無権移事不難(與するに権無ければ事を移すに難か

らず)

人につれだちしたがうときに基準・制限にこだわ
らなければ、変化に応じて自在に動ける

富貴功名皆是夢

富貴功名は皆是れ夢

富み栄え、功名手柄もすべて夢のまた夢

慇懃何必慕邯鄲

慇懃何ぞ必ずしも邯鄲を慕わんや

患え傷んでなんで「邯鄲の歩」(他を羨んで己を
忘れる)を望もうや、今までのままで自らをみた

せばよい。

※(邯鄲の都の人が上品に歩くのを、地方の者が
まねて失敗し這つて帰つた故事、(莊子)

己卯春日作于澤上一笑会心處不録裏詩二首博

(己卯) 春日澤上に作る。一笑会心の
處は録せず。裏詩二首は博し)

明治十二年春の日、沢のほとりで作つた。笑つて
すませるほどの作品は省いた。胸のうち詠んだ二
首はここに示すことにした。

布岳上人一粲 岳

布岳上人に献上する 五岳

※粲 自分の漢文を他人に見てもらおう謙遜語

※平野五岳(一八〇九〜一八九三)

文化六年日田

郡光岡村生。

専念寺に養子

となり、十一

才で咸宜園に

入。生涯仏門

に留まる。明

治二十六年歿。

詩文・書画に

秀でた。布岳

より二十五才

年長。

